

入門期の教式

杉田 すま

国語の学習を、私どもは『七変化の教式』（芦田恵之助の指導法）として教えて頂きましたが、入門期に限って五変化となります。教え込むのではなく、子どもの動きに応じて、「読む・書く」ことの楽しさや喜びを味わわせていくのです。

一 みる

文字を知らないとして出発するのですから、「七変化の一よむ」は無理です。そこで絵を見るしごとから入ります。子どもは絵本が大好きです。まして教科書は自分ひとりの本です。何遍でも繰り返し返して見て喜んでいきます。その子ども達に教科書の絵を好きだけ見させて堪能させます。その間に問答を入れるのです。絵を扱いつつ、子どもの知識、概念、生活経験を整理するのです。

ここで、問答の基本的な躰をきちつと身につけさせます。まず、「黙って集中して聴くこと。勝手な発言や、ハイハイとうるさく声を出すことを止めること。発言するときは、挙手して、指名されてからということ」を教えます。挙手の約束は入学の日から行います。そして、徹底的に守らせます。これは、学校生活を通じて守らせた習慣です。肝心なのは耳を大切にすることです。子どもはわかれば面白いのです。自分の考えや知識をきちつと整理してくれる話、納得のいく話を理解します。温かいわかり易い言葉で、静かにゆっくり話すことです。そして、先生も、子どもの話を落ち着いて注意深く聴くことです。

躰は、学習の中で必要に応じて行います。具体的な活動の中で好ましい行動を教え、習慣づけます。「腰を立てること。目をフラフラさせないことなど学習に集中すること」を自覚

させます。

「考えると面白い。そういえば何だろう」と目を見張るような言葉が先生の口から聴ける。そこで、子ども達は先生の話に聞き耳を立てるのです。絵に想像を加えたり、動かしたり、広がりを考えたりすることで、観察力や想像力も豊かになります。

子どもの答えは真剣に気持ちよく受け取ります。その上その発言が全員に行き渡るように、先生がもう一遍いつてやります。意味の通らないような発言であつたら、「こういうことでしょう」と補ってやります。問いと食い違つていても「ちがう」と素っ気なく切り捨てるのではなく、「惜しかったね」とか、「そう考えたか」とか答えを尊重します。

毎回工夫してテーマを決めて見させます。「花の咲いているところを見つけよう」「学校の出ている絵を探してごらん」と投げかけると、漫然と見ていた子も、勝手な所を見ていた子も一緒になって自然と歩調が揃います。山・海・動物・乗り物・走るものなどその気で見ると、子どもの喜びそうなテーマは工夫次第です。一つ一つの絵はあっさり扱い、前の日と重複しないように新しい話題を使います。終わりまで見終つたら今日の学習のページに戻って、今度は少し詳しく見ながら「ことばのけいこ」に結びつけます。

二 ことばのけいこ

「さあ、先生の口をしつかり見てください」と集中させ、「今出ていた海のことです」と、「うみ」と口を大きく開けて口形を見せ、子どもにまねをさせます。この時、鈴木先生の発明ですが、「」の所で息を継いだり休止したりするのですが、そこを子どもにはつきりわからせるように、ここで口を結ぶのです。このことは、作文を書くようになって、

はつきり効果を表します。

教育は自然が尊いと思います。子どもが言葉や行動を習得してきたのも、家庭の中で、周りの大人を見習って、自然に植え付けられてきたものです。「ああでもない、こうでもない」と押し付けるのではなく、子どもが自然にそこへ近づいていく意欲を持たせることだと思います。

その後で、今皆でいった言葉がここに書いてあるのだと教科書の文と語を照合して、三かくに移ります。

三 かく

今言った言葉を、本を見て書かせます。子どもはノートに、教師は黒板に書きます。

初めのノートは、ますの大きいものか、罫線のないノートを用います。せつかく指示しても忘れて、反対側から書き始める子、勝手な所を開けて好きな所に書く子がいますが、文句を言わないことにします。

板書を終えたら机間巡視して、一人一人のノートにさつと目を通します。課題のある子の個別指導は、二回目を書くとき、側に行って手を添えたり、大きく書いてやったりします。字形など気にせずに字の格好をしていたら「うまい、うまい」と励ましてやります。子どもは友達と比較して自分の書いたものが上手だとか下手だとかは少しも考えません。自分も大人のように字を書いたと大満足です。

こうして、師一回、子一回書いた後は、先生が一人で黒板に書いて見せます。皆に見えるように大きく、高い所へ、体を開いて一画一画説明しながら書きます。その後、「ここで口を結んだのですね」と、教科書になくても「、」や「。」をつけます。

今度は、子どもが自分ひとりでノートに書きます。こうし

て師二回、子二回書いたら次はこれを読む段階です。

この手続きにも深い意味があると思います。いきなり子どもに本を見て書きなさいというのは無理だと思つて、「うはこらかくのですよ」と始めたくなりますが、「先生が教えてくれないうちは書けない」という子でなく、とにかく自分でやってみよう、という態度が即ち自主性ではないのでしょうか。

「字を覚えさせる、教え込む」という考えでなく「親しませる」という余裕が大事です。「自分にも書けたと喜んで繰り返しているうちに、だんだん覚えていき、しつかりとした字になるということだ」と思います。

四 よむ

今書いた言葉をいっせいに読むのです。ノートも本もしまわせます。初めは指読です。「さつきのように大きな口を開けて、声は出さないで読みます。このとき大切なのがむち(鞭)です。一字一字「う」「み」と抑えずに「うみ」と一語にして読むように指します。次に皆で一斉に音読します。その時、むちが大活躍です。読もうとする意気込みを捕らえて声を揃えて読ますのです。大きい声、ゆっくり、はつきりという注文を最大に生かすのも先生のむちの先の意気込みです。全体の歩調を揃えるのです。

「あんまりうまいからもう一度」とか「今度は、男の子だけで」とか「次は女の子」とか、何回も読む練習をします。声のでない子どもだんだん大きい声に慣れてきます。子どもの声とむちと、呼吸が合つてくると張りのあるよい声が出ます。力いっぱい、皆揃って読んだ声の余韻の残る教室は、師・子共に快いものです。

五 とく

高学年のように内容をとくのではありません。応用といいませんが、板書に合わせて新しい字をいくつか書き加えるのです。

「黙って見ていてください。これ読めるかな」と新しい字を書き加えると子どもは目を丸くして見守ります。まだ習わない字でも、複雑な字形でも気にせず短い言葉を添えます。文字を覚えさせようとすると、易↓難とか、濁点はずつと後とか気を使うわけですが、教えるのではなく親しませると考えればどんどん出しても平気です。

例えば、最後の「うみ」の上に「あおい」と書いて、「うみ」「うみ」「あおいうみ」と読ませると、大収穫をしたように喜びます。よくやるようにノートに「あああ……」といくつも書かせるようなことは、子どもの心に喜びが生まれるわけがないと思います。意味のないことを機械的に繰り返すことを鈴木先生は戒められました。

◎ 移行期

こうして入門の扱いを一月か一月半くらいかかってやります。あくまでも文字を教えるのでなく親しませるのです。その間に学習態度の基本を身につけさせるのです。そして、だんだんに内容にも触れていき文章を読む面白さを理解させます。そうして七変化の教式に近づけます。「二ことばのけいこ」の後に順繰りに立って読ませたり、前時の課を一人ずつ読ませてから「みる」に入ったりします。

五とくの所で分解するという作業もあります。

「くまさんが　ともだちの　りすさんに　ききに　いきました。」という文なら、最後の「いきました。」を押さえて、「何しにいったの」(ききに)「誰にきいたの」(りすさんに)「誰が行ったの」(くまさんが)と「りすさんとくまさんは友達だからね」と確認します。

添えられた助詞によって、いろいろな意味を表すことを感覚的に掴んでいかせます。

◎ 学ぶ気構え

学習の始めに子どもの顔色を見ることから入ります。「先生に目を見せてください」と後ろの席から順に一人一人の顔を見ます。どの子もさつと姿勢を正して先生の顔を注目します。「さあ、これから勉強をするのだ」という気構えを見せてくれます。二時間目以降も、声をかけないまでも、全員の目を見ることを実行します。子どもは先生と一緒に勉強するのだと、緊張と満足の表情を見せ、落ち着いて勉強の方へ心を注ぎます。

◎ 先手と後手、打つ手と抱く手

先手が大切です。小言の逆に、「目をこんなに丸くしてしっかり見てるね」とか「腰をしゃんと立てて立派な姿勢ですね」といつてやると、子どもはうれしそうに直します。ただしタイミングです。ダラダラになった頃言い出しても、空手形です。授業の妨げになったり、他の子の困るようなことをしている時はピッシと正します。その後です。ハツと気がついて直したらすぐに笑顔をむけてやります。「よかったねえ」と心の中でいいながら……。若い頃芦田先生のお授業で一番心惹かれたのがそこでした。

叱らねばならないことの原因は大部分こちらにあることを悟ったのもその頃でした。忙しかったり、他のことに気をとられていたり、油断していたりです。先手を打ってさえおけば、乱れかけても、ちよつとした合図で止みます。

◎ 注文は小出しに

始めは緊張していませんから一言一言よく守ります。この時とばかりついでに、忘れないうちにとあれもこれも注文を出しますが効き目はありません。一番基本的なことから初め

て身に付いた頃に次の注文を追加するのです。先の約束がルーズになったら、タイミングを外さずに立ち直らせます。大目に見たり、見逃したり、取り紛れたりしているうちに何時の間にかダラダラした学級になります。

◎ たるまない 効を急がない

一か月程度は調子よく、よい滑り出しと喜んでいると、油断が出て、気を許したり、隙が出たり、せっかくのよいリズムをたるませるとお互いに地金が出て、勝手な行動やわがままで出てきます。よい習慣づけには何日もかかったのに崩れるのは早いものです。こちらも「学習の中で躓」と初心に戻り、同じ調子で同じ態度で臨まなければなりません。事を教えるには時間がかかるものです。それを根気よくやるのが教育です。「一遍聞いたら忘れない」というのは余ほどのことです。学習でも習慣でも繰り返し教えていくより他ありません。

◎ 子どもの気まま 先生の気まま

われ人と共に困るのが気ままです。子どもの気ままには、授業中の勝手な振る舞いやおしゃべり、叱られても平気、ボス化して嫌なことは家来に押し付け、組し易しとみると承知していたずらをするなどがあります。ケースバイケースです。から落ち着いて状況をよく見て対処しなければなりません。

気ままは子どもだけではありません。よく考えてみればこちらも相当気ままをやっています。教室に君臨しているのは自分ひとりをお願いすることに勝手に教科を変更したり、予定もないのに自習させたり、解り切っていることを繰り返したり、説明や解説が細かすぎたり飛躍しすぎたりしています。休み時間なっているのに長引かせたり、一時の思いつきでいろいろ試みたり、子どもの言い分も聞かずに理屈を押し付けたり、子どもはよく見えています。先生の心の隙はいち早く感じとつてまじめに付き合う努力を捨ててしまいます。

◎ 相対観、対立観をとり払う

子どもは千差万別、できる子、できない子、手の掛からない子、掛かる子、可愛い子、素っ気ない子、いろいろな尺度で分類すると子どもが見えた気がしています。先生の思う壺にはまる子を褒め上げたり、励ますつもりで〇〇さんのようにやりなさいと比較すればわかり易いと思っていたら裏目に出ます。やたらに優越感や劣等感を培うものになっていきます。どの子にもそれぞれ取り得があるものです。一週間もすれば打ち解ける子もあれば、一年位かかる子もあります。あの子にこんないい所があったのかと見直すこともあります。他の子と比較するなど無意味です。こちらから心を開いて接すると子どもの方から素直に心を開きます。「ぼくもほんとうはいい子なんだ」という安心感が、ほんとうは大切なのです。

◎ 単純な案をもって

子どもは単純ですから、単純が一番合うのです。単純とは簡単ということではありません。生粋な、ポイントのはっきりした夾雑物のないことなのです。仕事を指示するにしても、注意するにしても要点をはっきりさせ、おまけをつけてくどくなり易いのですが、具体的にそのものずばりです。

子どもが飽きたと見るや、「紙芝居にしましょう」とか、突然オルガンを開けて歌になったりとか、目まぐるしく展開して子どもはついて行けばいいというでは、思考力を育てることなど無縁になってしまいます。

◎ 共に育ちましょう

教式の中に子どもに注がれる尽きない愛情を汲み取り、私も一年生を担任しました。いろいろな場にぶつかる毎に自分を省みると、子どもから教えられることは数限りありませんでした。教式を通して、子どもと一緒に幸福を知りました。